

Inches

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

Centimetres

Kodak

LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black



貞操婦女八賢誌  
五編  
中

13  
2913  
16



0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

2

八十三  
2913  
16 特

貞操婦女八賢誌五編中

村田

東都 為永春水編次

第三一回

一席の儂曲頭小賊情を示す  
月下の艶書密に娼婦を厲む

案下愛嬌ハ咲一氣に亀太郎を指さうり於安小對門ニ  
示さるる這若流ハ武流る石濱の舞子なりしが此裡  
鎌倉へ登りしをて世活まる者のひりしゆを招き寄せて試  
みる其藝とらひ縹致といひ元をづきの艶しきまを回りの  
兒ゆへにうらうらと有がたは少幸ゆき吾海が方へ當るも

女八賢四輯の二

昭和九年  
七月六日  
購

今宵の真を添へんがよき舞の心を散みし七今一献を  
 遇言よと言ふまでお安の盃をおく頂くのそ最初より  
 好まぬ酒ゆゑよくも呑む後此舞子亀太郎と申すも  
 二八の豆づびとも女子むろりの其中へ此少年を當れと申す  
 酒の相もせざる夏傍痛く思ふも余とて色中も願ふ  
 程の言ひあると誉む 誹らぬ客旅りを那亀太郎ハ  
 密に見て心感へ居りけり有斯くやと腰元ハ  
 縁で準備とせしことり且バ鼓と拍笛と吹奏立あらふ  
 声と侶俱の扇と携てまゐる態も形容も美麗き  
 亀太郎ハ眞の今谷の戸を出初しより指も妙多声  
 ありまゐり今様のもの艶曲も澄りしり耳と  
 ありし目と後ろと舞の技のありもよき実ぬその技の  
 至妙と得る又あつべしと視へざりし余ハ愛嬉ハ  
 言ふもさるる老女従女婢女下仕まを此然しとて見  
 ぬ膝の找むを覺へぬまを須臾ハ時を移さるる  
 頓て儂曲も果しんか安の寢早よ折と思ふ屢々暇を  
 毛ふて其座を去らんと身を起しを愛嬉のあつと袖を  
 引止り四辺の人を遠ざけて身を摺寄り言活を低め

女八賢四輯の二

身と此程伴ひしより些頼りし仔細なれば今の逢ふて  
憑まんら翌の逢ふて吐きんくと思ふをうて虚ふるさぎしも  
世見を憚るのそくさびかん身の公を思ひうねて今まを  
言ひて延せしがど斯う打解しうあうら何時まをうつむ  
さ吾侪ふ一個の處女なり七名を鳥羽玉と呼びしが  
親の慾目からねども顔形容も媿うらねる扇が谷  
家へ出るさぎし定正さるの心意み叶ひ了り側妾と  
爲りて寵愛日増夜も長まをさぎも花の方の妬  
しうく稍もさぎさ處女が夏を悪さるふ言ひたるしと鮎

退けんと為りぬる吾侪母子が出世も叶つて若らの保  
にせらるんぬる處女が身のうぬ二ツぬる吾侪が此の莊園  
さ失ふ夏ふらうもあまび夫を雅知り放いぬるを  
虚しく為てひらんよう愁と重る花の方を人知れ刺  
殺しうた他ぬ邪アまる者もなく虚女ハき一語内君  
同様命へうらさる扇が谷家を起さるも仆も吾侪が  
自由と云ふ言ひぬの花の方の管領家の内君られば  
初の物語ゆも駿の供人うづげば多く近寄ると疑  
何と奥殿へ紛れ入り人うき折を見さるし七緯せける

あぐはひり一介を置て武勇はらむとあるとも男で出来ぬ  
此大役あるは程例尋に密くおん身の極みせむか  
武勇とひひ力量さへ女子にのみ有づく最憑も一く  
男のゆゑ駿兵の者小吩咐て此家へ侍らひませし一も  
只此大夏を憑まんらおん身吾侪が刺客となつて  
花の方を亡失と一怒を晴してあつて吾侪が所持する  
莊園の半限せしめておん身の淺く長く栄花を俱ぬ  
せん争受ひきめつらむと他ひなく言ひ置てお安の孩  
がど打合笑り形容せむらも是のまゝ異なるお憑る

既の響ゆる稟せとつり吾侪の賤の乙女もさぶ綱引の  
業の縫針の夏へも心得まば夫等の夏をお憑るら  
身ゆるさへ一も所為さども和君のさむの主人は  
齊しき花の方さぬせ殺し七具とのお憑る吾侪は及  
かぬ夏と幾重の許さるる言ふを覚嬉し神返り  
りふ謙退の言ひくくとそ開はまこ余りおん意なきさ  
おん身響ゆる義の為の湖崎の繩の戦ふを了に命も  
惜とめど今まこ吾侪が憑ひりて否とめぬぞ  
涙ねと再び言ひ置て些とも臆さざ然るを伴は稟ませ

吾侪の基より鄙び成長ど義の爲人の爲り  
命も何う惜まはらん然る和君の今の作義にも  
ひんぞ道はもひんぞ利慾の爲の内君さぬせ人知は  
殺せと開のお言話も覚へませぬ假令嫉妬の念深き  
花の方さぬゆもせよ貴女の爲の主人同前それを吾  
侪の教させお娘公鳥羽玉さぬの一旦お身の立はせよ  
不義の富貴の浮ぶ雲とら女子の如くぬ漢書も教て  
ありと有り人への得知らば此安の不義の荷勝は  
ませぬ昔を今ありるまで臣として君を害し身を立る者

ありとありども其家久しく保夏かー和君の才あり勇あり  
多し是等の道理を悟りぬ自ら不義の墮入らる  
莫然とそハ歎く一男ふす千慮の一失く獲ふハ心  
改めらる思し止りぬ自ら他の幸ひ此うぬは  
吾侪の所存の思の尚思按せられてとと憚る  
色多く忘るぬぞ愛憎の有り喜飲ぶと心中念と含む  
ゆゑ生心して居るが縁石奸智の白徒ゆゑ忽地完  
今と打候て嗚呼言はるるか安どの吾侪も基より逆  
意あけと今如此とと稟えかん身の心せ引見らる

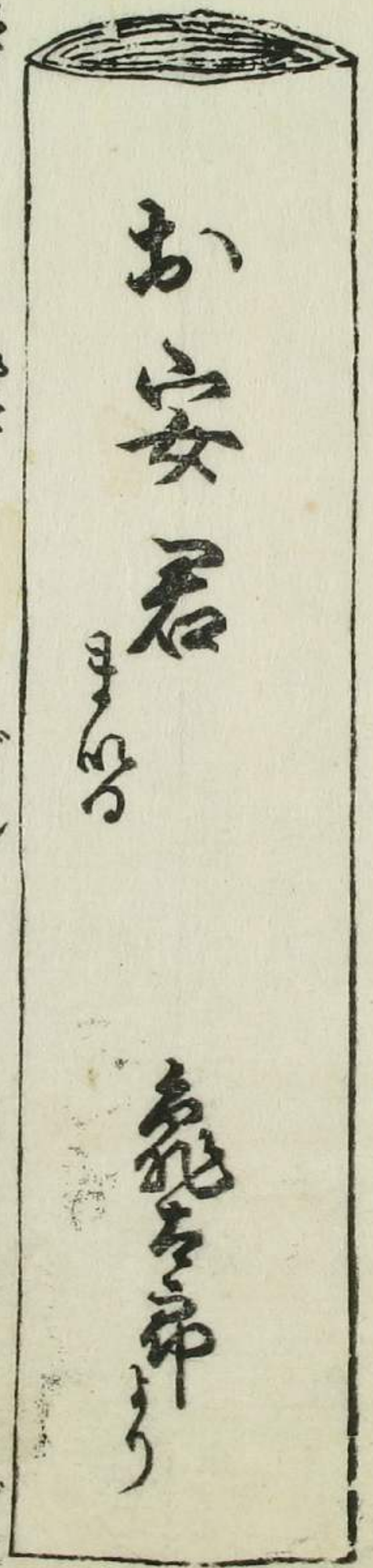


くるくび氣ゆるむむらさきと云ふはてお安も打合候と云  
 夜ものう更らるる誘お暇をと言ひつも立て愛嬉ハ止  
 せび最初小異り一欺待とお安ハ可笑く思ども更ぬま  
 色ぬも出まを頓て別道で長廊下那腰元誘をえの  
 一間ぬりうり一まの春の夜を更ぬて稍五満を  
 かりぬける當下お安ハ嬉しくと思ひまはせ此れどより  
 懇切ら一き欺待を訝しと思ひ居しお按ぬ遠はぬ  
 今宵の極子介は斯ま七逆心のひりくゝ知りて暮  
 甘み家おそろしき愛嬉が伎倆我捕はとるり一より  
 義の為ぬぬぬ一命せらるる道ま去らんとお後世まの  
 物笑ひと思ひ一ゆぬぬ覺期し七首付り日せ今翌と侍  
 よう他ハさうり一ぬ今宵の極子を見りぬ此身さうり  
 義を立て這呀命を没せしとて誰うまらひひりて同奴  
 種ハ一呪射お梅等お知をて呉るものもさく唯犬死に  
 くらんぬ死し七甲斐うき我身のうぬと云言へ愛嬉も  
 白徒りうり一此家を道まんとて易く道まりて  
 かりん奈何一とよらんと獨り思按ぬは竹の夜ハ  
 猶次身ぬ更るぬぞ何時のやどゆ兩晴て九日るその

女八賢四輯の二



月代まゝ雲間をり色て椽側の障子の透よりきり入る  
 庭の草の鳴連る蛙の声も物憂くて心がらるる旅  
 泊の悲しき腸と断ちたり断てもお安の左右の思ひ  
 うねつゝ稍須臾火桶の側め身せ寄りる傍首せ  
 垂て居たりしが借止ぶまふらふざむ六頓て卧房め  
 入らんとそ衣脱替んとまゐるやどふ懐よりしそ何せん  
 下ふバツタリ落る比ぞゆるらんと心小怪しと拾ひ取りて  
 しく視るふ一通の艶書ありお安のいよく誑しくゆるる  
 此やうなる鳴呼り所為せせしむると私語るるも  
 捨も盡さざれば先上書を焼下まふ



ほど怒りしうお安のいよく合臭ゆるぎ龜太郎と六最前の  
 舞若衆の名ありしが渠の年まご二八ふ  
 年でひるものを新艶らしし所為のせまど是もまご  
 那愛嬌が吾侪を計らん伎倆り余あても少の同も  
 由りせぬ我懐へ奈何しそ此艶書を密りふ入て盡しをえ

今も心細くも有りけるよし言はれ  
最鈍くも言はれ  
女の身に新る艶書をもちあはせんハあるまじき  
竟なき此休ふし七打捨る奈何なる奸計のあらんも  
知且び假令艶書を流ばとも我心さへ清くあらば誰か又  
不義といへん然うとや々と獨り貞頭封おし切て開き  
視るふ

密くふあめりりく吾侍る今宵の仲に父の  
讎する真間の術蟻を討果しやづくも兼て  
光期ゆき居りれば本望を遂うあふ外あ  
望もあつる身の直さぬ此家と立退中の然ては  
心細く存は幸ひのりゆが同及のうやづくと  
態と絶書の申すは認めそす上の海ども甚吾侍  
こと男妾の身をかりても実入も右奈三郎が  
娘めといふは心もきひの云用の心なれどまじき  
正八後やどの月ふうらま中上ぐんをりるごとく瘦  
彼もそある大望をいひのりも若も運拙く返付  
かものりるうまみのりといふはさかたにさし

お安魚

か免女

ト探返し〜まゝ護久〜てお安ハ獲き且某は怪ハ舞名  
元と思ひ〜八室よ古奈の娘有り〜吾侪も古奈は縁  
あるよりハ亡爺さん遺言此で縁てハ所てあり〜今其  
處女が讎討と知り〜余所見もなき支の〜吾  
情とバ最お〜てや此程あるぬき入賜り七本望を遂〜  
後の侶俱此家と走り去らん〜とまて密〜赤心と

知て〜争で阿容〜と一間の裡居らるべき假令間  
毎の滞り〜ありとも契の一晚〜忍びゆき余泣らる  
助太刀〜と安く本意を遂〜せん嗚呼余ありと  
点改折〜俄ふ契の肉強〜〜殺其の女子の声  
と思〜嗟堪〜苦〜と最〜〜听ゆらぬ  
を於龜が讎討の今や室中と覺〜〜時逢て下  
〜と言ひ〜頓て身様へ〜契をさ〜てぞ走りゆく

は第卅二回  
真間の里の旧譚み三郎暗死を

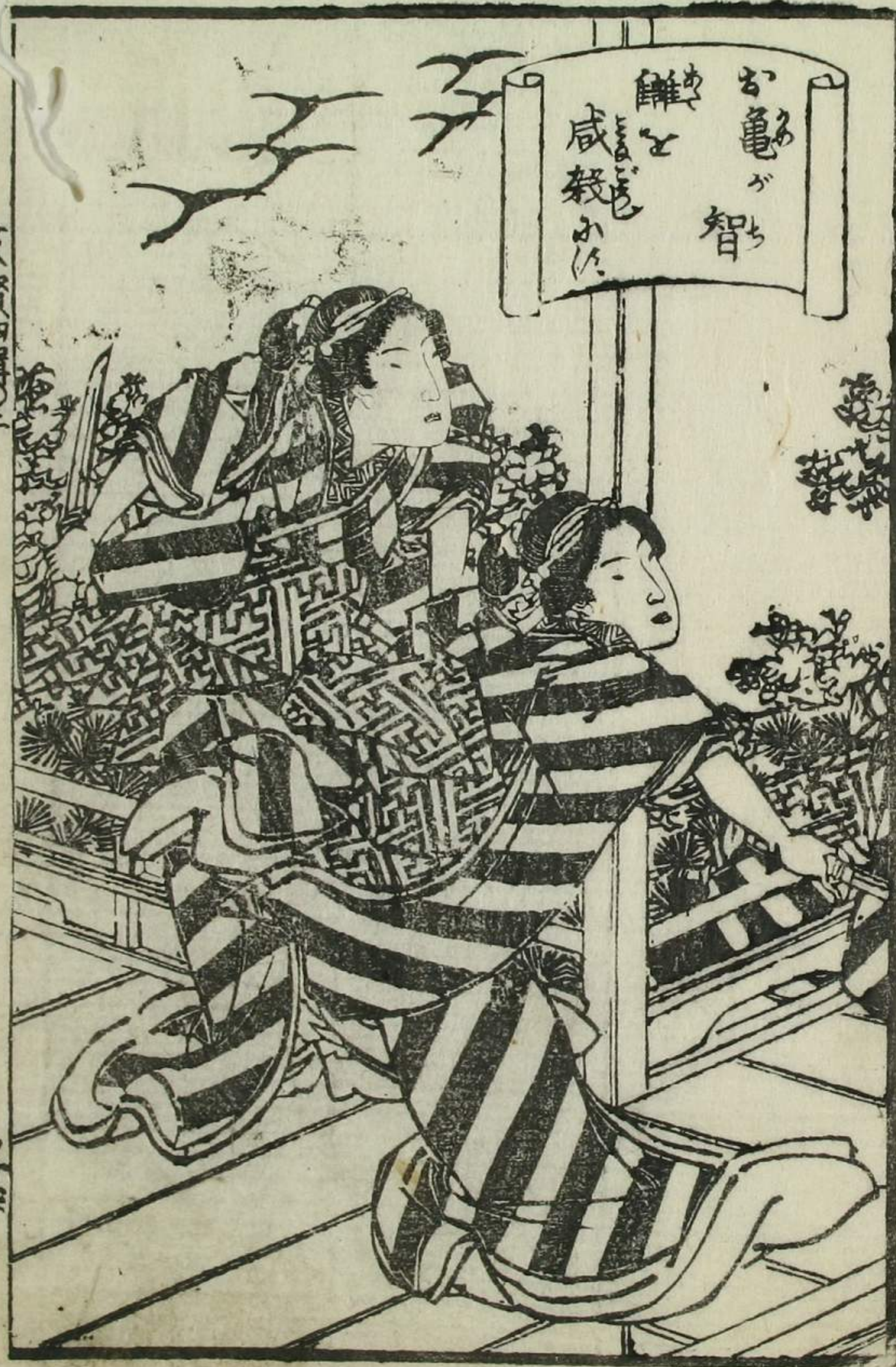
文賢四郎の二

自前話先の真間の愛嬉のお安の機密を憑き  
 思ひの他は性強く多く受引松子も受けまぶ公仲  
 深く憤且ど念も多き体ありてなほお安せ一間へ戻せら  
 ぬとさく心より折角酔ひ酒さ人も半ハ醒し心地よ  
 秀さる今一献亀太郎の酔を醒せ膝く飲んぬのこ  
 まこの酒席せりけり氣入の腰元等と亀太郎  
 のまを片辺みまきさうらさるる盆の数重れハ毛嬉の  
 まらり腰元までも最前の酔え何時の引かせし  
 ま十二分の機嫌とあり主従の袴も乱居居も  
 まに崩るまを酔を尽さまと言ふりけまぶあひハ  
 席に得堪びとつりて次め仆るあまぶ夫さるる  
 俯伏ゆりうるまを首をあげも眠る前後せぬ  
 ありそのとき愛嬉ハ亀太郎の膝の片袈もさるる  
 嘆くごとく白眼が如き絶らげり目尻めて率度  
 視かりり言活を依り吾儕が斯る振舞を和主ハ  
 嘆や心めて四十を越し身を持さる率にも恥ぢ  
 振あるまを可笑くも腹立し思はんが意ハ  
 思は他とから率ハと直どもかハ處女がう言ハまてハ

文賢四輯の二

余さうりぬ憎しとの思入り曲て今宵ハ流寐し  
吾傭が公を慰むよと言ひつゝ細き心せぬく  
其の亀太郎ハ是を志もせざりしが四辺を見まが腰元  
等々も酔ひ伏て正体なく野の声の音せぬが思ひ  
けん亀太郎ハ完余と笑しその怪め電嬉が思ひ  
くまらり膝下引付け急地声せあり立て蟻婦電嬉  
思ひおほ昔年下婦が奸計ゆそそく命を没しぬ  
る古奈の三郎が妾孕の處女武藏ぬりと成長し電女  
其の吾傭の是を苦中の苦せ忍び安を名を

きて唄ひの唄ひ一爺まゝの怒その又なやうけよと言ふ  
より迷く懐の懸し持しる利刀を抜るも見せぬ肩先  
より乳の下深く刺通さる打抜く間もあつたを余ども  
流石の白徒の痛疼の屈せどか起て片辺にあり  
懐剣と抜んと為りぬてを抜るもさび次付る  
お亀が迷き又尖の毛嬉が細首殺し落さる體ハ前  
ほど作はける此物音の狭き覺けん四下見外なる腰もと  
ぞも其曲者との間もあつた或ハ薙刀又ハ懐剣湯あせ  
引痛く殺めて菟るを輝ともせば這婢們も毛嬉ぬ媚び



諺の語を佐る白徒と思へば世も用舎せど左に色は  
首を引擧る右も小太刀を打振る競ふて蒐る徒女  
右と左の受流しまた砍結ぶ奮撃実戦暫時が程ハ  
我ふあつらう這方の神術至妙のひ女さうも最  
多の徒女  
うまごも争う敵もる夏と得べき隻も薙切の所立ら  
るるハ肩先腰車砍らう冬は叫びもあつら其呼命を  
落まのの僅らのうらふ三四人その余も疾疾を負へぬハ  
さく速るへいさや思ひけん刃と捨て逃迷ふとお龜ハ  
道よりと追ひ直砍直ゆくりはふ稍長廊下ハさうし時

まよや向ふた立ふさがる女の次女を見らうも  
けいぶあつらうおまねど是もうらふ腰元と思へば  
些も旗がど持らう刃と振揚て只一撃と砍つら  
身をひらりて受外しまた打太刀を振掛りて退く  
さうさ片辺の廊下の兩戸を渡らうさ庭  
さうさ月影ハ二女ハ思ひ顔見合せ於安さん  
でんさうりまおぬう然らういふお前ハ最前の「サ  
太郎ハ仮の名めて一室ハる古奈のお娘ハ於車  
まへハ最前の絶書でたらうとわおのさゆ私ハ縁

あつた古奈のお家その難討と听々争り金銀の見ま  
ぎ除き仔細に知らばとも助太刀たりて後やましくお前の  
本意を遂させんと思へば此も指縁せむ其の間きうて  
来る道に疾疾を負ひ一腰元ども逃り来るを踏  
仆れまた戻返一敲居るが遠所まで走り来り竹  
く又のや向ふ近き女暗夜ればお茶とおおね  
見も腰元と思ひの外み尖き太刀筋のら以兼一折も  
折蹴たらと両戸みき込一月と二個が尽せぬ以家  
危ひ直でござりまうこと言はまてお亀も打合咲私

憎の敵方と思ひ違へ一今の振舞込ひの怪家のかりり  
まも寔を照を月の賜へおめてもお安さんお前の助力を  
被らばら頼り洩しする腰元等が迷くも危厨へ逃げ  
駕のようを思ひどもみ頼知て再び押寄来ば不思議の禍の  
あつたふの夫らさゆぬ安くと敵の首を斬苗うり毛見と  
まよと言ひつゝも携する首をさう出まを月の光を左視  
右視つお安は寔余と打候て儲も見みひにうらまにうり  
おめても何ゆぬ愛嬌を爺公の敵として今宵本意ハ  
遂にとつと伺はまてお亀ハ歎息一言ふも面々さるる



我が家の実の母さんはるは古奈の家の側女なりし三郎とあり  
産を孕みし出産すまで六則ち私ありる産後の悩とはよく  
乳を出せぬは是非なくも乳を吸ひる者を尋ねりし私を里  
子み中を見しふ其後了に母さんの世の亡人となりしとぞ  
恸くてその羊の夏より風最寒き雪空に屋羽打り  
せ旅の女才なるる少女せ伴ひる古奈の川へ復て  
一夜の舎王を毛ひる基より私の爺公なる三郎とあり  
性とし七情涼き人の且不便と思ひけん母の親子を  
母屋へ喚が入と二個が松子を執りて親の母の三十才に

まごりて容貌を之卑しうぬみ子もまごりて愛らし  
殊な女の思と見ゆるゆを先の来由を問ひし旅の  
女の恥し氣の吾情の京家はへる某が妻なるが  
運拙くも夫を亡失せふ便りる身に都の住居も  
り難く些の知とせら當にけ東路みりし其人  
まへも今もも憑し氣を欺待ひを祈ふも思を止めて  
舎る木蔭もゆら儀の真間の入江みさるよの来て詮術も  
る親子が身のう衣表まて思ひのりよと泪を流して  
潭の水を不便の思ひをますとり数日止るよの流石

都の音も系竹の道も拙なる夜となく日となく興  
むる程めよく父君の心叶ひの時となく側女とあり  
信て五輪のまうをこゝろ那連子と年閑てたる十五方に  
り、一、一、思ひ寄らざる管領家扇谷より件の少女を  
召出さざし、定正ぬいの心叶ひはもまゝ管領家の竟ふ  
側女とあり、その那母親へ夫よりして禱りの心はさる物と  
父君は猶正妻あり其うなをその思ひれば鬼ても角  
ても此終めたる我身をまゝ復へるに、奈何めやせんと  
思按のうらみ一ツの奸計を新作意或日娘は射面と

く、く、選く鎌倉の趣きの先其娘と相談せしう、折と  
窺ひ定正ぬい、古奈の三郎逆意あり速く討ふと、是  
向らとぞ、奈何なるを、復とせんも、お且、いと種る、渡せし  
久、鈍くも女子に欺く、定正ぬい、愈り、お堪、お忍地  
殿、其の軍兵せし、総へ、さ、古奈の館を推捕、拘  
有無と言ひ、責より、父君へ不意を打、言  
解んぬも、術なく、是非なく、御ぎ、我ふの、敵ハ  
目の餘る大勢あり、自方、此の準備も、不、敵ハ  
研、い、憑、甲斐、若、黨、下、奴、殺、も、逃、

女賢四輯の二

ひりて瞬間の家内の男女も余波なく殺せしむる今も  
あも是まもと館の四方み火を放ち樓の社登り竟にお腹を  
斬且一とを却て後彼側女の扇が谷家へのより取り入り  
願ては古奈の莊園を残りき請受り其身ハ鎌倉の  
落付て怨と黒髪を切落し法名むり愛嬉と喚ぶ  
止表へ殊勝み見せしめて定正なり小媚溜ひ裡の淫  
酒と緯と七日夜奢み長ぜしとあり 儲まも吾侍ハ其  
とよ甲子にきざし先とのみ武藏の石濱の町入  
最頼母しき者も吾侍と實の娘と思ひ頼りしも  
兼程も種くみ言ひとて更みまも古奈へ戻さば  
侍て吾侍が五才の稔父君自殺しあひくぶのようく  
吾侍と隣りて其稔より舞をさす糸竹の所為と  
殺へらしむるも猶赤けも吾侍ハ兎角父の横死と  
雅心み口惜くて辛敵を想はんものと舞のる振の釋寄て  
太刀抜く術を試し時々のゆるを俟やとみ焼侍るも  
時とて里親夫婦引続き世をたよりく憑心方々ま  
身ひらと自ら心で厲しつ此相模路へ忍び来て舞差  
衆りて身とあり今宵本意ハ遂しと猶怨りまら

女賢四輯の二

定正まことねー又二ツ身ふたみの愛嬉あいきが狼おおかみ彼か鳥羽とりば玉たまも讒言ざんげんの片割かたわり  
一旦ひとたび此家このうちを立たたり時節ときせうを俟まちて那あの二名ふたにと想おもひで  
夫おつと並ならべまう介まが少すくせも誅つとけし最前さいぜんお言こと話はなひひ古奈こなの  
家うちの縁えんありあり夫おつと如何いかに多おほくく誤あやまりまりと向むかひひけりけり是こゝにに心こゝろへんへんとして  
まゝ更さらにお安やすいい口くちのの須臾しゆゐん言こと話はなも出いでできりりけりけり畢竟ひつじやう  
於安あやが答こたひひよよとと亦また甚いた麼ま多おほくく奇談きだんががあありり開ひらけけ次つぎの  
卷まきの解と分わけるるを听きねねりり 村田

貞操婦女八賢誌五編中

